

報道関係者のみなさまへ

性暴力被害者に取材する際のお願い

玄野武人

男性の性暴力被害の当事者としてこれまでなんとか取材に応じてきた経験から、性被害者にたいして取材する場合は次のような点に配慮していただきたく思います。

◆取材目的と、掲載や放映の予定を伝えてください。

報道予定がなくご自身の勉強のために取材したい場合もその旨を伝えてください。

◆被害者は自分の被害体験について開示すると、なんらかの影響が出るのが常です。取材に際してはその可能性を伝えてから取材してください。

※被害の傷が心的外傷(トラウマ)となるほど深い場合は、被害体験の再開示は再外傷になり得ます。被害者は一見平静に話していても、その心は深く傷ついていることがあります。被害者自身もまたその傷の深さに気が付いていない場合があります。

◆原則として、回復している人か、もしくは回復が一定程度進んでいる人を取材してください。

回復に取り組めていない、あるいは回復が進んでいない人に被害体験を尋ねることはハイリスクです。

したがって、被害者本人がセルフケアをできる、具合が悪くなったときに支援してくれる友人や家族・専門家を確保しているかどうかを尋ねてから取材や報道をするのが良いと思います。

◆報道されたニュースなどは今後も他の人や機関などに再利用されたり、ネット上で誹謗中傷を含めさまざまに言われる可能性があることを事前に説明してください。

そうしたことがあっても大丈夫という被害者に取材してください。

◆誰にも被害を話したことの無い人は、取材対象として選ばないようにお願いします。このことは特に注意を払ってください。

誰にも話したことがない場合は、話した結果どのようなことが起きるか予測ができないからです。

一般に回復が進んでいる人は、友人や仲間、セラピストなどに何度も話しており、被害を「物語」として語れるようになっていきます。

◆話したくないことは、話さなくても大丈夫ですと伝えてください。

◆尋ねにくいことを取材の必要上から質問しなければならない場合は、はじめに次のように言うとよいでしょう。

たとえば、なぜ逃げられなかったか知りたい時は、「この質問はあなたを責めているわけではありませんが、被害の実態を知りたいので、よかったらお答えください」。「取材のためにお尋ねするのですが、、、」「お答えするのが難しければ、お答えいただかなくてもかまいませんが、、、」などと前置きをします。

◆報道関係者の個人的な好奇心から深く尋ねないようにしてください。

性被害者にインタビューすると被害の詳細などあれこれ知りたくなるものですが、それが取材目的や研究目的を超えて個人的な好奇心から質問するようにならないよう気を付けてください。

このような興味の持ち方を「悪魔的な好奇心」とわたしたち被害者は言っています。

◆「あなたが話してくれれば、次の犯罪を未然に防げます」は禁句です。

これまでに性被害者は報道関係者のこの発言にさんざん傷つけられてきました。被害当事者が話すのは、社会のためでも、報道のためでもなく、本人が人生を取り戻すためであることが第一です。

◆実は取材もまた、カウンセリングや自助グループと同じく、本人の回復に貢献することが大事です。そのつもりで取材に臨んでいただけたら幸いです。

被害本人に話す準備ができているときに取材すると、被害者・報道・社会の三者にとって良い結果が生まれると思います。

実際に取材してもらってよかった、報道してもらってよかったという被害者はいます。

◆原稿やテレビの脚本(構成)はできるだけ事前に見せてください。見せられない場合はその旨を事前に伝えてください。

性被害はたいへん偏見が多いため、報道関係者の書く原稿やテレビ構成にも間違った内容が入り込むことがあります。

◆取材において、間違いを犯したり、性被害者を傷つけたりしたときは、すべてを正直に話して、率直に謝ってください。まちがいは誰にでもあるものです。ごまかしや隠蔽がもっともよくない対応です。

むしろ誠実に対応することを通じて、「嫌なことがあったけれどきちんと対応してくれたから、この報道関係者ならもう一度話してみよう」と性被害者に思ってもらえるような対応を目指してください。

◆性暴力被害の基本について書籍や講習会などで事前に学んでおいてください。特に女性や男性の「レイプ神話」について理解しておいてください。

◆以上をまとめると、「取材の基本」を丁寧にしていただくことに尽きると思います。取材対象者との信頼関係を築いて、それを大切にさせていただくことだと思います。

わたしたち性暴力被害者は報道関係のみなさんと交流することを通じて、よりよい社会を築くことに貢献したいと思っております。